

# 現代フランス語の冠詞・試論 I

日 高 佳

0. フランス語文法を教えていて難しいことは沢山あるが、冠詞の用法ほど捩摺るものはない。日本語には冠詞がないので、我々は冠詞については殆ど不感症に近い。その上、日本語では単数と複数の区別を明確にしない。「秋だねえ、魚源の店に秋刀魚が入っていたよ」とか「林檎を買ってきたよ」などの表現はごく普通であって単数のまま複数の秋刀魚や林檎が理解されている。山々、人々、木々のような複数表現もあるが、むしろこれは例外と見る方がよい。冠詞と複数をその言語構造の中に持たない我々にとっては、これらの使い方を身につけることは至難の技と言っても過言ではない。G.Mauger: 《Cours de Langue et de Civilisation françaises I》の初級文法を説明していても、《Grammaire, Cours de Civilisation française de la Sorbonne, 350 Exercices ,Niveau moyen》や《Niveau Supérieur I》の練習問題を解いていても、「冠詞の何故」は随所に出没し、学生たちと共に考え込むことが多い。そのようなものを拾い出しながら「フランス語の冠詞の何故」について考えてみたい。

1. 初級文法では冠詞は下記のように示されている<sup>1</sup>。

	初めての話題 として示す	既に話題になっ たものを示す	総称的に示す (～というもの)
1) 数えられるもの として示す場合	不定冠詞 [ un une des ]	定冠詞 (単・複) [le(l') la(l') les]	定冠詞 (単・複) [le(l') la(l') les]
2) 数えられないもの として示す場合	部分冠詞 [ du (de l') de la (de l') ]	定冠詞 (単) [le(l') la(l')]	定冠詞 (単) [le(l') la(l')]

この説明は冠詞の初歩的な概念を把握するには適切である。

- (1) Voici un livre. Voici un crayon. Maintenant, le crayon est sur le livre.
- (2) Le chien a quatre pattes. L'oiseau a deux ailes.
- 、(3) Au petit déjeuner, dit M. Vincent, les Français mangent moins que les Hollandais ou

les Anglais.

- (4) Nous déjeunons à midi. Nous mangeons de la viande, des légumes, de la salade et un dessert. Nous buvons de l'eau et du vin ou de la bière.
- (5) Mme Vincent commande du thé, Pierre et Hélène demandent du chocolat.[ ... ] Enfin il (le garçon) sert le thé, le chocolat, [ ... ].
- (6) Mme Vincent fait cuire une tarte aux prunes. [ ... ] 《Jip (le petit chat), tu n'aimes pas la tarte aux prunes. Tu regardes ce beau poisson, [ ... ]. Pierre, lui, aime mieux la tarte que le poisson!》

(1)～(6)の例文はいずれも G. Mauger, Cours de Langue et de Civilisation françaises I から拾い出したものである。(1)では、「これは本です。これは鉛筆です。」と話題に初めて登場してくる本と鉛筆には不定冠詞がつけられ、「その鉛筆はその本の上にあります。」と既に話題になった本と鉛筆には定冠詞が用いられている。

(2)の定冠詞は「～というもの」という総称を示している。「犬(というもの)は四つ足です」, 「鳥(というもの)には二枚の翼がある」, ここでは「その犬」とか「その鳥」というような特定の犬や鳥を表しているのではなく、犬という動物、鳥という動物という概念のみを示している。

(3)では、(2)と同じように定冠詞は総称を表すが、複数では個々のフランス人の集合のニュアンスが強くなり「フランス人は朝食にオランダ人やイギリス人ほど沢山は食べない。」となるが、単数であると「フランス人というもの」となり抽象性が高くなる。

(4)の例は初めて話題となるものを量として捉えて表現している。

(5)では、「その量として表現されたもの」が「既に話題になったもの」して定冠詞を伴って表されている。ヴァンサン夫人が紅茶を注文しピエールとエレーヌがココアを注文する段階では部分冠詞が用いられているが、ボーイが実際にそれらをサービスする場合には定冠詞が用いられている。(6)では、最初の不定冠詞は初出の話題を示し、次の定冠詞は既に話題になったものを表し、最後の二つの定冠詞は総称を示す定冠詞と考えられる。「ヴァンサン夫人は杏のタルトを焼いているが、飼い猫のジップはその杏のタルトを好まず魚の方に興味がいっている。ピエールは魚よりもタルトの方が好きだ。」というのであるが、魚が単数le poissonで捉えられているのは、ピエールが食べる魚、du poissonの総称として示されているからである。

2. 定冠詞の役割の基本は「既に話題になったものを示す」であるが、既に話題になった名詞とは「身元が明確になった、つまり限定を受けた」名詞と考えることが出来る。手にした

幾冊かの文法書<sup>2</sup>によれば、だいたい冠詞の項には、「定冠詞は名詞が限定されていることを示すために名詞の前に置かれる語」<sup>3</sup>とか「名詞の表すものが既知のものであることを示すために名詞の前に用いられる語」<sup>4</sup>と書かれている。しかし「限定されたもの」、「既知のもの」とはどういうものか、その定義は余りはっきりとは明記されていない。共通して記されているのは、「唯一無二のもの」、「話者の間で周知されているもの」、「文脈によって限定されるもの」、「既に話題になったもの」、などである。「既に話題になったもの」については例文(1)(5)(6)で見てきたので、他の例を上げてみたい。

(7) La petite Hélène met le couvert.

(8) Les Vincent viennent de sonner à la porte des Legrand.

(9) M. Legrand serre la main à M. et à Mme Vincent.

(10) Mme Vincent va passer une heure dans la salle de bains ! Du rouge sur les lèvres... du vernis sur les ongles et [ ... ]

(11) Il est midi. Le soleil brille. Il est minuit. La lune et les étoiles brillent.

(12) Nous partirons dans un mois pour la France.

(7)~(12)の例文も(1)~(6)と同様にG. Mauger, Cours de Langue et de Civilisation françaises I から抜き出したものである。(7)の例では、固有名詞の前に形容詞が先行しなければ定冠詞はいらない。この定冠詞の意味するものは何か、説明のつかぬままに「人名に形容詞が先行すれば定冠詞が必要」と機械的に覚え、学生にもそのように教えてきたが、これは「限定の定冠詞」と考えられる。これについては、松原秀治氏が名著「フランス語の冠詞」の中でLe petit Jeanの例を使って納得の行く説明をしておられる。松原氏は「『限定』とは他のものとは違う『唯一物性』を示すことだ」と主張され、「Jeanという名をもった男は大勢いるし、そのなかには小さいのもまた多数いる。しかし、その中でも、《小さい》といえは話し手と聞き手とが必然的に思いつくのがle petit Jeanであると考えるのが分かりやすい。人名の前に形容詞をつければ定冠詞をつけるという文法規則は存在せず、この定冠詞は話し手と聞き手との間に成立する唯一物性を表す記号である」<sup>5</sup>と説明されている。JeanをHélèneに変えれば、この説明はそっくりそのまま(7)の定冠詞の例に当てはまる。(8)では、固有名詞の前に定冠詞の複数形が用いられている。文法書では「複数定冠詞+家名はその家族、その一家を表す」<sup>6</sup>と記されている。les Vincentはヴァンサンの家族、または、ヴァンサン一家となるが、この定冠詞も「限定の定冠詞」と考えるべきであろう。ヴァンサンという姓を持つ人は大勢いるが、話し手と聞き手の間で一致して思いつく「あのヴァンサン」という意味での定冠詞であり、それが複数になるのは「あのヴァンサンを名乗る人々すべて」を表すためである。そこから「ヴァンサン一家、ヴァンサン家の人々」という意味が出てくる。

(9)(10)の例は、身体の部分を表す名詞に用いられた定冠詞である。これらも「限定の定冠詞」である。serrer la main à qn.は相手と握手をすることであるから、その手は右手と限定される。(10)の例では、口紅を塗る唇、マニキュアをする爪は文脈からヴァンサン夫人のものと限定するため用いられた定冠詞と考えられる。

(11)のle soleil, la luneは「唯一無二のもの」を示す定冠詞である。太陽や月は世界の中で唯一無二の存在であることを示している。les étoilesは「唯一無二のもの」というよりは「総称の定冠詞」であろう。大空にはいろいろな種類の無数の星が存在するがそれらの星全部を総称して表したものである。(12)の例は国家の名の固有名詞につけられた定冠詞である。大抵の文法書には「大陸, 国, 地方, 山, 海, 川, 島の名を示す固有名詞には定冠詞をつける」と書かれている。これも「限定の定冠詞」と考えてよい。しかし、国名の固有名詞もいつも定冠詞をとるとは限らないことを、松原秀治氏は次のような例を挙げて示されている<sup>7</sup>。

(13) Que dire et comment parler au nom d'une France désunie !

[不統一なフランスの名において何をいい、そしてどのように話すのだ!]

(14) Sa formule n'a rien de subversif : 《une Irlande unie, pacifique, prospère et libre.》

[彼の標語はなんら破壊的なものを含んでいない。すなわち、《統一された、平和な、繁栄する自由なアイルランド》である。]

(13)の例は、フランスが第二次世界大戦中にドイツに占領され、ヴィシー政府とド・ゴール臨時政府の二つに分かれフランス国という確固とした統一体ではなく、どのようになって行くのか不明のフランスには「限定の定冠詞」は使えないことを示している。

(14)の例は、「唯一無二」の存在としてのアイルランドを示しているのではなく、国の形として「独裁的な」とか「民主的な」とか「豊かな」とか、いろいろな選択肢のある中から《統一され、平和で、自由で、繁栄する》アイルランドについて言及しているため不定冠詞が用いられている。

3. (15) Le printemps commence le 21 mars et finit le 21 juin. (G. Mauger, I)

(16) Presque tous les musées nationaux sont fermés le mardi.

(17) Ma fille est née un dimanche.

(18) Je viendrai te voir dimanche.

(19) Le viticulteur vend son vin 30 F. la bouteille.

(20) Les œufs coûtent 4 F. la douzaine.

(21) J'ai payé les carottes 5 F. le kilo.

[(16)~(21); Grammaire, 350 exercices Niveau Supérieur II, Hachette.]

(15)の例はフランス語では四季の名、日付けの前には定冠詞が用いられることを示している。(16) (17) (18)は曜日の前の冠詞の用法の例である。定冠詞の用いられた(16)では、「火曜日閉館」という意味になる。(17)の不定冠詞は「ある日曜日」、(18)の例では、無冠詞の日曜日は時を示す副詞となり「日曜日に君に会いに行く」という意味になる。(19) (20)は、「その葡萄栽培農家は自家製ワインを一本30フランで売っている」、「卵の値段は1 ダース 4 フランである」、「私はその人参を買うのに1 キロ当たり 5 フラン支払った」というのであって、我々の感覚ではそれぞれ *une bouteille*, *une douzaine*, *un kilo* としていたいところである。

(15)の定冠詞は「限定の定冠詞」と考えることが出来る。「春は(春分の) 3月21日に始まり(夏至の前日) 6月21日に終わる」というのであれば、それらは確定していることであり定冠詞が用いられることに不思議はない。しかし(16) (19) (20) (21)の定冠詞についてはどう考えるべきであろうか。フランス語で書かれた文法書、英語で書かれた文法書<sup>8</sup>、日本語で書かれた文法書など、多くの文法書がこれらの用法について「定冠詞の特殊用法」として言及しているが、その根拠については説明がなく、慣用的な用法と記している。しかし、1988年に初版が出された一川周史氏の「冠詞抜きでフランス語はわからない」<sup>9</sup>はこの「冠詞の何故」を明快に解き明かして呉れている。一川周史氏は松原秀治氏と同じく、定冠詞の用法の基本は「1. 名詞を指示／限定する(この、その、あのに相当するもの／身元の明らかなもの)、2. 名詞を意味するものの総称(一分野の全体であることを示す標識)を表す」<sup>10</sup> ことにあるとしながら、更に、この「この二つのケースに共通する冠詞的な情報は、何らかの意味で名詞がその表すものの全部であることに集約できる」<sup>10</sup> と主張されている。つまり、定冠詞がつくとその名詞が表すもの、名詞が意味するものの全部を表すということになる。これは、今までの文法書や研究書には見られなかった新しい見地である。この考え方に従うと、(16) (19) (20) (21)の例文での定冠詞の用法が理解される。(16)での *le mardi* は、「全部の火曜日」つまり「毎週火曜日閉館」ということになる。G. MAUGERの文法書は、これについて、*fermé le lundi (= tous les lundis)*<sup>11</sup> と説明している。これから次の例の定冠詞の用法も理解される。

(22) *Nous sommes fermés le 10.* 「毎月10日はお休みです」

(19) (20) (21)の例は、我々の感覚にしたがって不定冠詞 *un*, *une* を使った場合、不定冠詞には身元を明確に表す機能はないので、「ある任意の一瓶」、「ある種の12個」、「任意の1キロ」という意味になる。「限定されたその瓶全部」、「限定された12個全部」、「キロという限定された単位」、これらにつき幾らの値段と表現するには定冠詞でなくてはならない。

4. 不定冠詞、部分冠詞の基本的用法は、名詞を「初めての話題として提示する」ことにあ  
る。聞き手に対して「身元が明らかにされていないもの」、「既知のものでないもの」として

提示することにある。そして、不定冠詞は名詞を数的に、部分冠詞は名詞を量的に表す。日本語、フランス語、英語を問わず多くのフランス語文法書には、不定冠詞、部分冠詞について大体このような説明が記載されている。さらに踏み込んで、「不定冠詞、部分冠詞は名詞を『存在しているもの』として表すが、定冠詞は『存在の有無』よりもその名詞を『既知のもの、限定されたもの』として示すこと、が役割である」と説明している文法書<sup>12</sup>もある。これらの説明は不定冠詞、部分冠詞の用法のいくつかの側面を捉えているが、一川周史氏はもっと普遍的に「この両冠詞に共通する基本的性質は『より大きい全体の一部を示す』ことだ」と述べ、「定冠詞が全部を示す冠詞とすれば、この両冠詞はより大きい全体の一部を示す一部冠詞である」とし、その種類を次のように提示している。

	男性単数	女性単数	男・女性複数
不定冠詞	un	une	des
部分冠詞	du (de l')	de la (de l')	

(23) «— Un journal, s'il vous plaît. — Quel journal, mademoiselle ?

— Je suis à Paris depuis deux jours seulement et je ne connais pas les noms des journaux.

— Nous avons des quotidiens. Par exemple : 《L'Humanité》, 《Combat》, 《Le Figaro》. Il y a aussi des journaux du soir : 《L'Information》, 《France-Soir》, 《Le Monde》, 《La Croix》

— Les quotidiens paraissent-ils le dimanche ?

— Non. Mais je vends ce jour-là des hebdomadaires, comme 《France-Dimanche》

— Merci madame. Je prends ce journal. [ ... ] >

(G. Mauger, Cours de Langue et de Civilisation françaises I, p.123)

不定冠詞の単数un(e)は、本来が数詞であり、これを伴う名詞の表すものは「ひとつ」であり、しかも「どれ」と限定されないものであることを示し、「ある一つの」、「どれか一つの」、「ある種の」などという意味を表す。(23)の《Un journal, s'il vous plaît.》は「どれか新聞を一部下さい」となり、次のles noms des journauxの定冠詞は「パリに着いたばかりで (ここにある) 全部の新聞の全部の名前が分からない」、つまり、話し手と聞き手の間で既知のものとなった新聞、そしてそれらの名前を示す「限定の定冠詞」となる。des quotidiens, des journaux du soir, des hebdomadaires, これらの複数不定冠詞は、新聞スタンドの女性が幾種類かの日刊紙、夕刊紙、週刊紙を売っていることを初めての話題として提供していることを表している。そ

してそれらの新聞がそれぞれ固有名詞で示され、特定のものに限定されると定冠詞が用いられる。《Les quotidiens paraissent-ils le dimanche ?》, 「その日刊紙は毎週日曜日も発行されるのですか」となると、日刊紙は話し手と聞き手の間で「既知のもの」, 「限定されたもの」となり定冠詞が用いられている。日曜日は定冠詞を用いることで、例(16)で見た通り「全部の日曜日」という意味から「毎週日曜日」となる。

次に、部分冠詞の例を同じく G. Mauger, Cours de Langue et de Civilisation françaises I の中から拾い出して見よう。

(24) A midi, Je mange de la viande (ou du poisson, ou des œufs), des légumes et un dessert.  
Je bois de l'eau et du vin, puis du café.

(25) 《Voulez-vous un repas bien français ? Des hors-d'œuvre variés, un bifteck-frites.  
Cela veut dire : avec des pommes de terre frites. Ensuite nous prendrons du fromage.  
Enfin, nous finirons le déjeuner par une tarte et un café.》

(26) Mais Pierre, gourmand, prend et reprend des confitures.

部分冠詞は、ある分野全部を示す定冠詞 le, la, les の前に部分を示す小辞 de が伴われたもの、つまり du (de+le), de la, des (de+les) と考えることが出来る。日本で編纂される教科書には、部分冠詞の複数形 des を省略しているものが多い。日本の教科書ばかりでなく、G. Mauger, Cours de Langue et de Civilisation françaises I においてもこの部分冠詞の複数形は省かれ、du, de la, = un peu de ~ と説明されている。私が大学で初めて手にしたフランス語文法の教科書には、この des は省かれることなく記載されていたが、その説明には「不定冠詞複数と同形であり、普通これと区別する必要がない」<sup>13</sup> と記されていた。授業で補足説明がなされたに違いないがすっかり忘れてしまい、ただ、量を示す冠詞が複数形を持つのは不思議だと思ったことを覚えている。松原秀治氏は「フランス語の冠詞」の中で部分冠詞の複数形について一応触れられて、「des を不定冠詞 un(e) の複数として見るほかに、部分冠詞の複数と見る文法学者もある」、「部分冠詞が部分を示す小辞 de と総称の定冠詞が組み合わせられて成立したと考えるのは妥当であろう」とされながらも、部分冠詞の複数形 des 用いた例文を示されることがなく、部分冠詞の複数には消極的な姿勢をとられている。G. Mauger は初級教科書、Cours de Langue et de Civilisation françaises, I では、部分冠詞として du, de la のみを扱い、Grammaire pratique du français d'aujourd'hui の中では複数形 des をとり上げている。但し、説明はなく Je prends du pain qui est sur la table (= une partie de ce pain qui est ...), des confitures qui sont dans le pot (= une partie de ces confitures qui sont...) という例のみを示している。M. GREVISSE も Précis de Grammaire française の中で部分冠詞の複数形を扱っているが、J'ai mange des épinards という例を挙げ、「du, de la, に照応する複数である」とだけ説明を加えて

いる。Grammaire Larousse du français contemporainでは「複数 des は不確定な量を示す」という説明と共に、Il y a des pommes dans le garde-manger. という例が添えられている。一川周史氏は「不定冠詞 des はそれぞれ独立したバラバラの個体の複数を、部分冠詞 des は《群》としてしか見ない複数を示す」と説明されている。例文(24) (25)での de la viande, du poisson, de l'eau, du vin, du café, du fromage は実際に口にする食べ物や飲み物であるところから、部分冠詞を用いることによって、若干量を示し、大きな全体の一部を示している。松原秀治氏は「《boire》, 《manger》はフランス人にとって具象感の強い動作であるため常に部分冠詞がついてまわるという特徴がある」と述べられ、「manger le pain, boire le vin というような表現をフランス人はとらず、フランス人自身も不審に思っているが、これは本能的なものであろう」と類推されている。次に、des œufs, des légumes, des hors-d'oeuvre variés, des pommes de terre frites, des confitures, であるが、卵は個体として独立しているので des œufs は不定冠詞の複数、des hors-d'oeuvre variés も幾種類かの前菜の取り合わせで個々に独立しているので不定冠詞の複数である。des légumes は《manger》の直接目的補語となっているので「野菜をいくらか食べる」と量を表し、《群》としてしか見られない複数を示す部分冠詞と考えられ、M. GREVISSEの例文にあった des épinards や Grammaire Larousse の des pommes の部分冠詞と同じである。des pommes de frites, これは不定冠詞と見るか部分冠詞と見るか迷うところであるが、文脈から不定冠詞と考えられる。manger des pommes de frites であれば、「フライド・ポテトをいくらか食べる」で部分冠詞と考えられるが、「ごくフランス風の昼食はどうですか。前菜取り合わせ、フライド・ポテト添えのステーキ一皿, チーズ少々、最後は一皿のタルトと一杯のコーヒー」というように不定冠詞を用いてメニューを示しているので、独立したバラバラの個体の複数を示す不定冠詞である。液体で、数えられない café という名詞に(24)では部分冠詞、(25)では不定冠詞が用いられている。本来、物質名詞には定冠詞もしくは部分冠詞が用いられるが、café を実際に飲むコーヒーとして量的に捉えるときには部分冠詞、「一杯のコーヒー」として数的に捉える場合には不定冠詞が用いられことを(24) (25)の例は示している。例文(26)のdes confituresは《群》としてしか見られない複数を示す部分冠詞と考えられる。「部分冠詞の複数は特殊な場合を除いて無い」<sup>14</sup>と主張するBRUNOT et BRUNEAU が特例と認める部分冠詞の一つである。

5. (27) Pour aller au premier étage, nous prenons l'escalier, car la maison n'a pas d'ascenseur.

(28) Il n'y a pas de cahier(s) sur la table.

(29) Les Vincent ne boivent pas de vin, sauf aux jours de fête.

初級文法のどの本にも、「否定文中の冠詞」として「動詞が否定形るとき、直接目的補語につく不定冠詞・部分冠詞は de となる」というような説明が書かれている。(27)では un



ascenseur, (28)では un cahier / des cahiers の不定冠詞が, (29)では du vin の部分冠詞が de に変形したものである。この冠詞の変形は否定文のすべてに起こるわけではなく, 直接目的補語の全面否定の時にのみ起こる。例文(30)~(34)は否定文でありながら, 直接目的補語に先立つ不定冠詞・部分冠詞が残存している。

(30) Je n'ai pas économisé de l'argent pour le dépenser en futilités.

(31) Cet homme n'a pas seulement du bon sens, il a aussi du courage.

(32) Personne n'a ressenti une angoisse aussi vive que celle que j'ai éprouvée lors de cet accident.

(33) Je ne bois pas du vin de Bourgogne, mais je bois volontiers du vin de Bordeaux.

(34) N'avez-vous pas des amis, de la fortune ? (G.Grévisse : Précis de Grammaire française, p.78)

[(30) ~ (33) ; Grammaire, 350 Exercices Niveau Supérieur II, Hachette. ]

(30)の例文は, 「無駄な散財をするためにお金を節約したのではない」という意味で, 否定は直接目的補語 de l'argent にではなく, 状況補語 pour le dépenser en futilités にかかっている。(31)では, 否定は du bon sens にではなく, seulement にかかり「その男は良識があるだけでなく勇氣もある」となる。(32)では, 「その事故の時に私が体験したような激しい不安を感じた人は今まで誰もいない」となり, 否定は修飾部分 vive にかかり直接目的補語を否定するものではない。(33)では, 否定文と肯定文が対立し, 肯定文に合わせて冠詞が用いられている。一川周史氏はこのような例を「訂正を予期する否定」での一部冠詞の残留と説明されている。「私はブルゴーニュ・ワインは飲まない」というのであれば, Je ne bois pas de vin de Bourgogne, となるが, その後に「しかし, ボルドー・ワインなら喜んで飲む」という対立する肯定文が来ると du vin de Bordeaux に合わせて, 否定文にも部分冠詞が表れる。(34)は, 否定表現でありながら, 実際は反語的な肯定表現と考えられている例で「親しい友人も資産もお持ちでないとおっしゃるのですか (そんなことはありますまい)」という意味になる。

それでは「否定文の冠詞 de」とは何か, いろいろな考え方があるが, 一川周史氏は「beaucoup de (多数の・多量の), peu de (僅数の・僅量の) の数量表現と同様に pas de は数量ゼロを意味する。一部冠詞は情報として若干の数と量を示すので, pas de の後には無冠詞の名詞が来る」, 「冠詞があるということは, 『名詞の表わすもの』が存在する, ゼロにならないことだ」<sup>15</sup>と説明されている。この説明は明快で分かりやすいが, 私は pas de を数量表現の副詞と考えてよいか迷う。beaucoup de, assez de, tant de, autant de, trop de, plus de, moins de, combien de, 等, 多くの数量副詞は de の後に無冠詞名詞を従える。pas de だけを考えればこの考え方は明瞭であるが, 他の数量表現の後の無冠詞名詞はどう考えるべきであろうか。私と

しては、「pas, mie, point など僅少量を表わす名詞とともに用いられていた de が次第に冠詞として独立していったものだ」<sup>16</sup>と考えるKr. NYROPの考え方に賛成したい。「否定文の冠詞 de」は「数量ゼロを示す」と考えるのは無理であろうか。そのように考えれば、冠詞情報として数量を伝えない定冠詞は直接目的補語に先立していても否定表現で残留することが出来る。

(28)の例は、Il y a un cahier / des cahiers sur la table.が否定文になったものであるが、「数量ゼロの冠詞」de の後には単数名詞も複数名詞も可能になる。ゼロは単数でも複数でもゼロにしてしまうからである。

(35) Ce n'est pas un omnibus, c'est un express.

(36) Ce ne sont pas des vers, ce sont des poèmes en prose.

(35) (36)では、否定文でありながら不定冠詞は de に変形することなく残留している。「それは普通列車ではなく急行です」, 「それは詩ではなく、散文詩です」というこの構文は、 $A \neq B / A = C$ であって、Bが存在していなくてはならない。Bにあたるun omnibus, des versは pas d'omnibus, pas de vers になって名詞の存在がゼロになってしまうことは出来ない。そのためには冠詞の存在がどうしても必要になり、deに変形することが出来ない。

6. ヨーロッパ言語の中でフランス語は最も冠詞の発達した言語であるが、そのフランス語においても冠詞の使用が一般的になったのは16世紀であると言われている。M. GREVISSE は「ラテン語では冠詞は用いられておらず、冠詞は古代フランス語にその起源を持ち、使用もごく限られたものであったが、次第に使用範囲を拡張して行き、とくに名詞や形容詞の複数語尾 - s, 女性語尾 - e の無音化に伴い、冠詞は名詞の性・数を示す道具として急速に発達して16世紀には規則的用いられるようになった。」とし、更に「定冠詞はラテン語の指示代名詞、指示形容詞 ille を起源とし、不定冠詞はラテン語の数詞unusを語源としている」<sup>17</sup>と言っている。指示詞を語源とする定冠詞は名詞の『身元』を明らかにする冠詞に、数詞を語源とする不定冠詞はun seul, un certain, un quelconqueと意味の範囲を拡張して行き、名詞の『身元』が明らかにされていない「どれか」であることを示す冠詞に成長して行った。部分冠詞が登場するのは、これらの二冠詞より遅れるが、名詞の『身元』が明らかにされていない「どれか」の若干量を示す冠詞として不可欠な存在となっている。森本英夫・三野博司編纂の「フランス文法参考書リュミエール」では、《フランス語はとてもお洒落な言葉です。名詞は家の中にいるときには（辞書の中に並んでいるときには）帽子を脱いでくつろいでいますが、一旦外出するとなると（文の要素として用いられるときには）その名詞の性および数のマークのついた3種類の帽子を用意し、必ずそのうちの1つをかぶります。ですからその帽子を見ると、男性名詞か、それとも女性名詞か、単数か複数か、そして初対面かそれとも以前に



なければ家から外へ出ることが出来ない。その選び方にはルールがあり、話し手は自分の心的過程を分析し、それを客観化し明快に示すのに最適な帽子を選ばなければならない。我々の言語では、自分が事物をどう捉えているかを分析せずに、つまり概念化を行わずに表現をしてコミュニケーションが成り立つ。我々の言語は、対象世界を論理的に分析しようとはせずに、直接的に感覚的に絵画的に捉えようとする。それは決して悪いことではない。我々は概念化の度合いの少ない分だけ、対象世界をデリケートに微妙な違いを見逃さずに認知することが出来る。話し手の態度を高度に文法化して表現を作り出すフランス語と概念化の度合いは低い直接的、即物的な表現を選ぶ日本語との言語構造の違いが我々に冠詞や数の扱いの理解を難しくさせている。帽子をかぶらずに外出した名詞、すでに別の被り物（形容詞など）を頭に乘せた名詞に対する帽子の扱い、などについては次回に譲り試論Ⅰを終わることにする。

#### 註

1. 森本英夫・三野博司, フランス文法参考書 リュミエール, 駿河台出版社, (p. 24)
2. MAUGER, M. Grammaire pratique du français d'aujourd'hui, Hachette, Paris. 他
3. GREVISSE, M. Precis de Grammaire françaises, Gembloux, Duculot (p. 74)
4. CHEVALIER, J-C., B-BENVENISTE, C., ARRIVE, M., PEYTARD, J. Grammaire Larousse de français contemporain Larousse, Paris (p. 216)
5. 松原秀治, フランス語の冠詞 白水社, 1978. (p. 24)
6. MAUGER, M. Grammaire pratique du français d'aujourd'hui, Hachette, Paris. (p. 114)
7. 松原秀治, フランス語の冠詞 白水社, 1978. (p. 24 ~ p. 26)
8. COFFMAN CROCKER, MARY E. French Grammar 3 ed. Schaum's outline series McGraw-Hill, Toronto. CELESTIN, Julio. French Grammar Harper Collin, New York. W-STYLIANOU, Valerie. French Grammar Cassell, London.  
これらの文法書ではおおむね次のように説明されている。"The definite article is used with days of weeks to indicate habitual occurrence. The definite article has the meaning of every or on. Ex. : Le dimanche, je ne travaille pas. (On Sunday I don't work.)" "The definite article is used with expressions of quantity when used in conjunction with a price to indicate per. Ex. : Les tomates coûtent deux francs le kilo. (Tomatoes cost two francs a {per} kilogram.)"
9. 一川周史, 冠詞抜きでフランス語はわからない, L'Article, clef du français 駿河台出版社, 1988.
10. 一川周史, 新・冠詞抜きでフランス語はわからない, L'Article, clef du français 駿河台出版社, 1996. (p. 14)
11. MAUGER, M. Grammaire pratique du français d'aujourd'hui, Hachette, Paris. (p. 97)
12. 森本英夫・三野博司, フランス文法参考書 リュミエール, 駿河台出版社, (p. 29)
13. 山田 爵・松下和則・梅原成四・平井啓之共編, 新編フランス文典, 第三書房, (P. 20)
14. Brunot et Bruneau は、部分を示す小辞 de + les → des によって成立する部分冠詞の複数形は特殊ケースとして認めているが、原則的には部分冠詞に複数はないとしている。[L'article partitif n'a pas de pluriel. Pour un Français, 《DES croissants, DES radis》, est le pluriel de 《UN croissant, UN radis》. Il n'existe de forme plurielle de l'article partitif que dans un cas particulier, quand un nom susceptible d'être précédé de cet article n'a pas de singulier. Pour les personnes qui disent : 《faire les confitures》,

《Prenez DES confitures》(de la confiture) offre un 《des》 partitif. ] BRUNOT et BRUNEAU, Précis de Grammaire historique de la langue française. 3<sup>e</sup> éd., 1949, (§ 316, p. 226)

15. 一川周史 新・冠詞抜きでフランス語はわからない (P. 26)

16. NYROP, Kr. Grammaire historique de la Langue française, 8<sup>e</sup> éd., Copenhague. Tome V (§ 146. p. 185)

《Si la négation est absolu, on se sert de la préposition seul: Je n'ai pas d'argent. Il ne m'a jamais prêté d'argent. ... Comme on dit peu d'argent, un sac d'argent, on dit de même je n'ai pas d'argent. La négation suivi de la préposition seule signifie: aucune quantité de.》

17. Grévisse, M. Le Bon Usage, Gembloux, Duculot (Belgique), 6<sup>e</sup> éd., 1969. (p. 255-p. 259)

#### 他の参考文献：

WARTBURG, W. v., Evolution et structure de la langue française, 5<sup>e</sup> éd., 1958.

BRUNOT, F. La pensée et la langue, 3<sup>e</sup> éd., 1953.

WAGNER, P. L et PINCHON, J Grammaire du français, Classique et Moderne, 1962.

GUILLAUME, G., Langue et Science du Langage, Paris, 1964.

朝倉季雄 『フランス文法事典』 白水社, 1955.

朝倉季雄 『フランス文法論』 白水社, 1988.

大橋保夫他 『フランス語とはどういう言語か』 駿河台出版社, 1993.

荒木博之 『日本語が見えると英語も見える』 中公新書, 1994.

小泉賢吉郎 『英語のなかの複数と冠詞』 ジャパンタイムス 1989.

正保富三 『英語の冠詞がわかる本』 研究社, 1997.